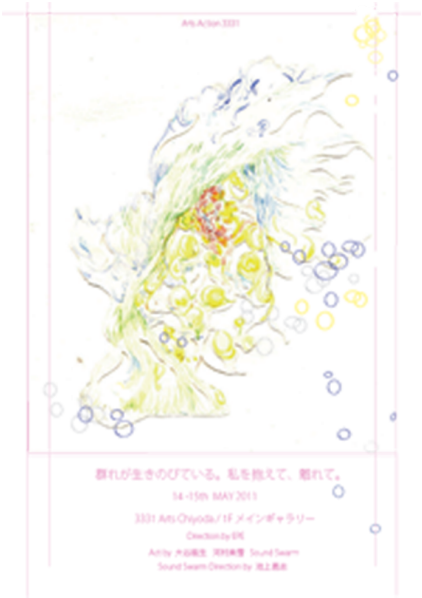
群れが生きのびている。私を抱えて、離れて。
プレスリリース

EPE では 2011 年 5 月 14 日 ,15 日に、多層メディアアートパフォーマンス「群れが生きのびている。私を抱えて、離れて。」を東日本大震災復興支援「Arts Action 3331」にて発表します。

本作品は、5/13 日中にゲネプロを行います。本番以外にゲネプロでも取材としての鑑賞を受け付けております。
本プレスリリースにてご興味持っていただけましたら下記にご連絡ください。
miyuponta @ gmail.com
０９０－６５１６－０３０６ （河村美雪）

数えられない記憶が未来空間を告げている。
私がここを離れても。
音と記憶のセッション、3stages.



Date 2011. 5/14,15
14:00 - 15:30（15 日のみ）
18:30 - 20:00（14,15 両日）
60-90min 3 stages
各回定員 60 名
Space 3331 Arts Chiyoda / 1F メインギャラリー
Ticket 2,000yen
（50% が東日本大震災の義捐金として寄付されます。）

Direction by EPE ＜池上高志 × 大谷能生 × 河村美雪＞
出演：大谷能生、河村美雪、Sound Swarm
Sound Swarm Direction by 池上高志
Programming 大海悠太、松本昭彦、丸山典宏
音響 半澤公一 (innovation)
制作 渡辺タケシ（ふつうの人新聞）
協力：大海研究室（東京工芸大学）、ペンと点（東京造形大学）、FOSTEX COMPANY
主催：池上研究室（東京大学）× CS-Lab（東京造形大学）

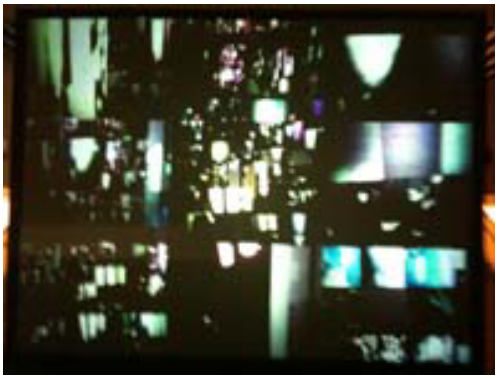
*EPE とは：Exploring Performances Experimentally の略語。
パフォーマンスを実験的に探検する。
複雑系科学者 池上高志と美術家 河村美雪による Science and Art Project『群れが生きのびている。私を抱えて、離れて。』のための制作、Direction 名義。今回はここに批評家、音楽家の大谷能生を迎えてシステム × 言葉 × 音の即興セッションを展開する。

群れが生きのびている。私を抱えて、離れて。
プレスリリース

『群れが生きのびている。私を抱えて、離れて。』は、記憶が相互作用するサウンドインスタレーション × パフォーマンス作品です。

科学者　池上高志による サウンドインスタレーション

複雑系科学者の池上高志は、「記憶すること忘れること、同時に記憶を呼び起こすことに焦点を当てた」サウンドシステム Sound Swarm（音の群れ）を作りました。 Sound Swarm は ART WORK であると同時に、 人工生命を専門とする池上高志の研究の一環でもあり、単純に音を再生する装置ではありません。 システムについて池上は「 まるで生き物のように、 自律的に記憶が相互作用しながら群れを作り、仮想空間の中を動き回る。そんな多次元の記憶システム、Sound Swarm にはある種の意識や無意識が芽生えるかも。」と述べています。Sound Swarm は大量の短い音声ファイルが鳥が群れを成すアルゴリズムに従ってお互いに 近寄ったり 離れたりしながら、あるものは再生され、あるものは永遠に損なわれ、音の群れを成していきます。この動きは人的なコントロールを許さず、一度動き始めると自律的に、つまり勝手に相互作用をしながら動きや群れのパターンを変えていきます。 ここに池上は脳科学的見地による「記憶すること忘れること、 同時に記憶を呼び起こすことに焦点をあてたプログラミング」を施し、「意識／無意識」の立ち上がり方を実験するとともにあたらしい問いを投げかけています。



写真：記憶と意識の生成に関する池上高志の別作品 Mind Time Machime (2010,3 月　YCAM)

Artist 河村美雪による過去からの問いと演出

河村美雪はファインアートの立場から、鑑賞するのではなく経験する時空間を立ち上げる目的で、即興要素の強いアートパフォーマンス作品を制作してきました。メインワークのひとつ「インタビュー・ショウ」は、インタビュアーがインタビュイー独自の記憶の作られ方を問いによって探っていく様子を、時に身体表現や音楽、ダンスを交えながら毎回、即興でショウにしていきます。ひとつの作品でおおよそ 2~3 名のインタビュイーが登場し、 3 公演（リハーサルを含めると 10 公演程度）、毎回テーマは同じだが「違うルートを辿った問い」にあたらしく答えていきます。そうすることでインタビュアーとインタビュイーの間には一種の対戦相手でもあり、まだ見ぬゴールを目指す共謀者でもあるような、緊張と信頼の両面を兼ね備えた影響関係が生まれ、 パフォーマンスを強く牽引していきます。インタビューショウとは、「今、ココでまさに作り替えられている記憶」を、私と世界の結び直しの出来事として、目撃者＝観客の内部に起こす装置でもあるのです。

群れが生きのびている。私を抱えて、離れて。
プレスリリース

今回、河村は池上との３度目のコラボレーションにあたって、かねてより押し進めたいと考えていた「外側から影響されて、今まさ編集されている記憶」を Sound Swarm との相互作用によって立ち上げようとしています。
河村の用意した映像の断片が、Sound Swarm との相互作用によって「過去からの問い」として目の前に出現します。それは、パフォーマーにとって過去からの問いであると同時に、他者へ向けられた問いでもあります。パフォーマーは空間を飛び回り、構築されていく「意識＝Sound Swarm」と遊ぶことで、徐々に立ち現れる「過去と現在、私と他者」の境界を行き来し、「消えていく記憶と生きのびる記憶」が共にある現れを、経験する出来事＝リッリなハプニングを起こしていきます。

写真　左：myspace, のようなので。(2009,1 月 駒場小空間)、右：EPE (2010 年 7 月 アサヒアートスクエア 池上高志＋河村美雪 コラボレーションワーク)

音楽家、批評家 大谷能生による即興パフォーマンス

河村は、『群れがいきのびている、私を抱えて、離れて』のインタビュイーに批評家、音楽家、そして近年はパフォーマーとしても活躍する大谷能生を迎えました。大谷は、彼の著作からも伺いしれるように、過去や現在において見えにくい音、イメージといった視聴覚の世界へ、文学や実在する人物と共に分けいってゆきます。それは、未来へ開かれる「あたらしい時空間のイメージ」を自由闊達に探索しているかのようです。また、Jazz や電子音楽の即興演奏家でもあり、自らの身体と反射神経を使って、「今、ココの環境との相互作用」を実践しつづけてもいます。
『群れがいきのびている、私を抱えて、離れて』では、言葉やロジックと、身体や感覚、そのどちらもを使いこなし、多様な探索行為をする大谷能生と、生命らしい意識の振る舞いを見せる Sound Swarm の競演が河村の 全体的な演出によって３公演繰り広げられます。おそらく、公演を重ねるたびに、「見えない意識と仲良くなろうとする愛」が試みられ、遊びの進化のプロセスもまた、観客は目撃することになるでしょう。

群れが生きのびている。私を抱えて、離れて。
プレスリリース

Science and Art　東京大学 × 東京造形大学

EPE は、本企画の関連ワークショップ『エーテルスイミングスクール』を、東京造形大学の学生団体ペンと点と共に開催してきました。
東京大学池上研究室縁の研究者（宇野良子 / 認知言語学、大海悠太 / 人工生命、池上高志 / 複雑系科学）をまずはお招きし、生命、意識、記憶、進化、コミュニケーション、というテーマに向き合ってきました。
毎回、一般の方や他の大学の学生も広く参加していただいています。
研究者による実験や問いの立て方を経験してみることは、「作品を作るワークショップ」とは異なり、若いアーティストにとって自分とは異なるルートでの思考に目を開く一歩となるでしょう。アカデミック分野とアート、お互いに使っている地図を交換してみれば、相手の地図が要請してくる制約から、作る道具やルートが変化し冒険したくなるあたらしい世界が生まれ直す。道具やルートの交換と更新を長期的に試行錯誤するコラボレーション関係を築こうとしています。
今後も、大谷氏を迎えての批評と作品の相互作用に関するワークショップなど、引き続いて展開していく予定です。

ペンと点　サイト
http://pentoten.zokei-st.org/

東日本大震災復興支援「Arts Action 3331」参加企画

EPE では、東日本大震災支援「Arts Action 3331」に賛同し、本企画の収益の 50 パーセントを義捐金として寄付します。寄付する先は、活動の趣旨に賛同できる復興支援 NPO 団体などを現在選定中です。

池上高志（Takashi Ikegami）

複雑系研究者。理学博士。東京大学大学院総合文化研究科、広域科学専攻、（広域システム科学系）教授。コンピュータのシミュレーションや化学実験などによる構成論的なアプローチから「生命とはなにか」を問い続け、新たな生命理論の構築を目指す。著書に『動きが生命をつくる―生命と意識への構成論的アプローチ』、共著に『複雑系の進化的シナリオ』『東京大学公開講座 ゲーム』ほか。

大谷能生（Yoshio Otani）

批評家、音楽家。96 年、音楽批評誌「Espresso」を立ち上げ、02 年まで編集、執筆。日本のインディペンデントな音楽シーンに実践と批評の両面から深く関わる。著書に『持ってゆく歌、置いてゆく歌　不良たちの文学と音楽』（エスクァイアマガジンジャパン）、『散文世界の散漫な散策　二〇世紀の批評を読む』（メディア総合研究所）がある。菊地成孔とのコンビによる講義録は本書のほかに『憂鬱と官能を教えた学校 【バークリー・メソッド】によって俯瞰される 20 世紀商業音楽史』（河出書房新社）、『東京大学のアルバート・アイラー　東大ジャズ講義録』（全 2 巻、文春文庫）、『M/D マイルス・デューイ・デイヴィス III 世研究』（エスクァイアマガジンジャパン）がある。

河村美雪 (Miyuki Kawamura)

Artist。2000 年以降、映像、ハプニング、インスタレーション、パフォーマンス、コラージュ、インタビュー作 品を発表。2006 年にアートパフォーマンスカンパニー「Co. うつくしい雪」を設立し、舞台芸術にも進出。以後、言葉、動 き、記憶、時間、空間を扱い、イマ・ココ で作り替えられ続けている外側と心の相互作用を通して「世界の見え方が変わる瞬間」を作る。